

2015年安保 国会の内と外で

表題の本が 2015 年 12 月に岩波書店から出版された。奥田愛基さんの参議院特別委員会公聴会での公述、2015 年 9 月 19 日の国会前スピーチなど心に迫る。ここでは、哲学者の西谷修さんの「はじめに 政治の杭を打ち直す」の一部を紹介したい。



これほどの政治や政党の質の劣化のもとで、戦争体制を準備する法案が通されてゆく。実はこの夏起こったのは、安保法制そのものへの反対だけではなく、このような劣悪化した政治に対する抗議でもあったのだ。----- 被災地の復興や原発事故の処理にまともに取り組む代わりに、オリンピックで目くらましをし、経済成長のためと企業ばかりを優遇して、働く者や子育てする女性たちを困窮に追いやり、その手当てをするよりも軍事化で国のあり方を強引に変えようとする。国民のための政治ではなく、四の五の言わせず国民を国家に奉仕させる体制を作ろうとする。そして社会の疲弊を「安全保障」という名の軍事の壁に塗り込める、それがいまの政権の路線である。こういう事態にいちばん腹を立てるのは若者たちだ。

「あたりまえの政治」をやってほしい。人びとが「まともに」に生きられるようにする政治、誰もがそれぞれに自由であり、かつ支えられて生きられるような社会、それを憲法が保障しているはずではないか。だったら少なくとも憲法を守れ。それに基づいて政治をやれ。そのことを政治家に要求する。自分たちが政治をやりたいわけではない。ふつうの人間がそんなことに首まで漬からなくてもよくするのが、国政を預かる政治家（それに官僚たち）の役割ではないのか。

政治のプロがその役目を忘れて、自分たちの都合のいいように国を変えようとする。だが国民はかれらの操縦するガレー船（手漕ぎの軍船）の奴隷ではない。民主主義って何だ？ 民が、デモスが第一ということだ。だからこそいま、政治を専門家たちに任せではおけない。勝手なことをするからだ。かれらを監視し、みんなのためには働いてもらわなければならない。そのためだったら努力もしよう。声を上げるだけでなく、工夫もしよう。政治をまともにするために関与もしよう。政治家たちに協力もしよう。そして政治の場を変えてゆこう。それがこの夏の日本の空気を変えた若者たちの姿勢だ。

新しい政治のかたちは、まだ芽が出たばかりだ。土壌はある。この畑に水を撒き、若芽を育ててゆかねばならない。それだけがわれわれの失いかけた未来、開かねばならない未来の足場である。

(2016年4月16日)